

個人の端末をプロジェクトで使用 「BYOD」を実現できた密なリモートコミュニケーション

株式会社グッドパッチ様
ウェビナーレポート

Goodpatch

jamf | PRO

アプリやWebサービスなど、デジタル系のUI/UXデザインの領域で業界をリードしているグッドパッチ様。コロナ前よりリモートワーク専門のデザイン組織「Goodpatch Anywhere」という新規事業を立ち上げ、2020年6月、デザインカンパニーとしては初めて東証マザーズに上場しています。リモートワークの端末を効率的に運用するために「BYOD」を導入し、プライバシー・セキュリティを守りながら、Jamfによる端末の一元管理を実現されています。管理部で情報システムを担当されている遠藤祐介氏と、Goodpatch Anywhereの事業責任者である齋藤恵太氏にお話を伺いました。

※BYOD (Bring Your Own Device) : 従業員が個人所有の携帯用機器を職場に持ち込み業務で使用すること

スケールしていくために選んだBYOD

● 端末の初期化・郵送・返却というサイクルからの脱却

物理オフィスがなく、ハイペースでの人員増加と高い流動性の中にあって、当初は端末を貸与する形で、Goodpatch Anywhereを支えていました。プロジェクトにアサインされたメンバーにキittingされた端末を郵送し、プロジェクトが終われば端末を返却してもらい、初期化して次のプロジェクトでまた渡すというフローです。

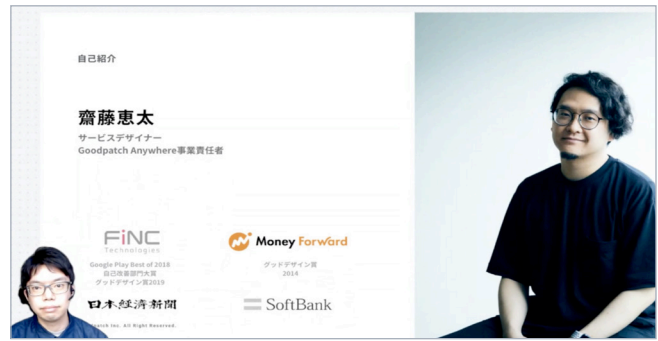
しかしながら、3か月程度のプロジェクトで端末を都度購入することは難しく、お客様の都合でプロジェクトが急に始まり、案件の受注から開始までに時間がないのが常です。海外にメンバーがいて郵送が難しいこともありますし、なにより毎日のように発生する初期化・郵送・返却という作業を続けていくにはスケールしていかないとこの課題でした。その解決策としてBYODを検討していくことになりました。(遠藤氏)

BYODに対するニーズはメンバーからも出ており、会社から支給する、都度初期化して使用する端末では、どうしても型落ちしてしまうとか、スペックが足りないといったことがありました。(齋藤氏)





クリエイティブを殺さない情シス体制の構築に取り組む管理部の遠藤祐介氏



メンバーのニーズを捉え、BYODを進めたAnywhere事業責任者の齋藤恵太氏

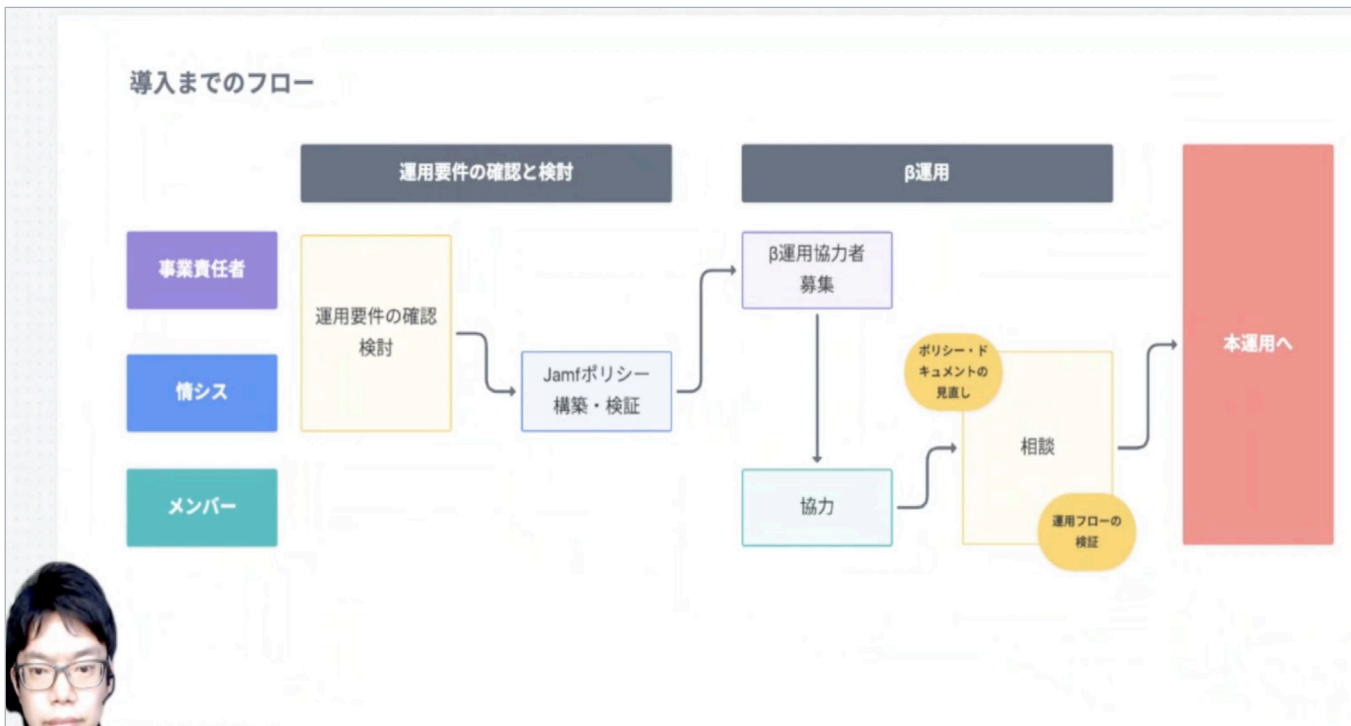
●メンバーの協力を得てBYODをβ運用

もちろん、BYODにはリスクがあるのは承知していましたが、まずAnywhereで使用しているツールを整理し、どのようなリスクがあるのかを洗い出しました。Anywhereでは、ローカルでの作業はほぼなく、ツールは殆どがクラウドサービスで、ローカルにはデータが入っていない状況でしたので、BYODの導入を本格的に検討していくことにしました。(遠藤氏)

クラウドのツールは通信量が多く、意外とスペック要求が高いことが多いです。特にフリーランスのメンバーは自分の環境に投資していますので、それらを仕事でも使いたくなります。そういった要望に応えたいということもBYOD導入の動機の一つでした。(齋藤氏)

まず運用要件の確認とリスクの再検証、Jamfポリシーの構築と検証を行いました。実運用してみないと分からない部分がありました。そこでβ運用という形で実運用を考えたところ、何人かのメンバーが協力してくれるということで、実際にBYODを試して、リスクやポリシーを確かめることにしました。

個人の端末を業務に用いますので慎重になるべきです。どんなポリシーならプライベートのユーザーに影響がないか、運用に煩雑なところはないかなどを確認し、フローやドキュメントを整理していき、本運用に至りました。(遠藤氏)



クリエイティブを殺さない情報システム体制を目指す

●「組織全体としてのチャレンジ」と認識

遠藤は「クリエイティブを殺さない情報システム体制を目指す」とよく言います。いいものを作るためには、働きやすい環境を整備しなければなりませんし、コミュニケーションがしづらいと情報の流通が悪くなり、プロジェクトのクオリティに如実に影響してきます。

無駄にガチガチな運用ルールを作るとか、管理プロダクトを入れるといったことにはかなり慎重にやっています。ビジネスの根幹が「作り出すもののクオリティ」ですので、そこが弱くならないようにすることを最優先しています。(齋藤氏)

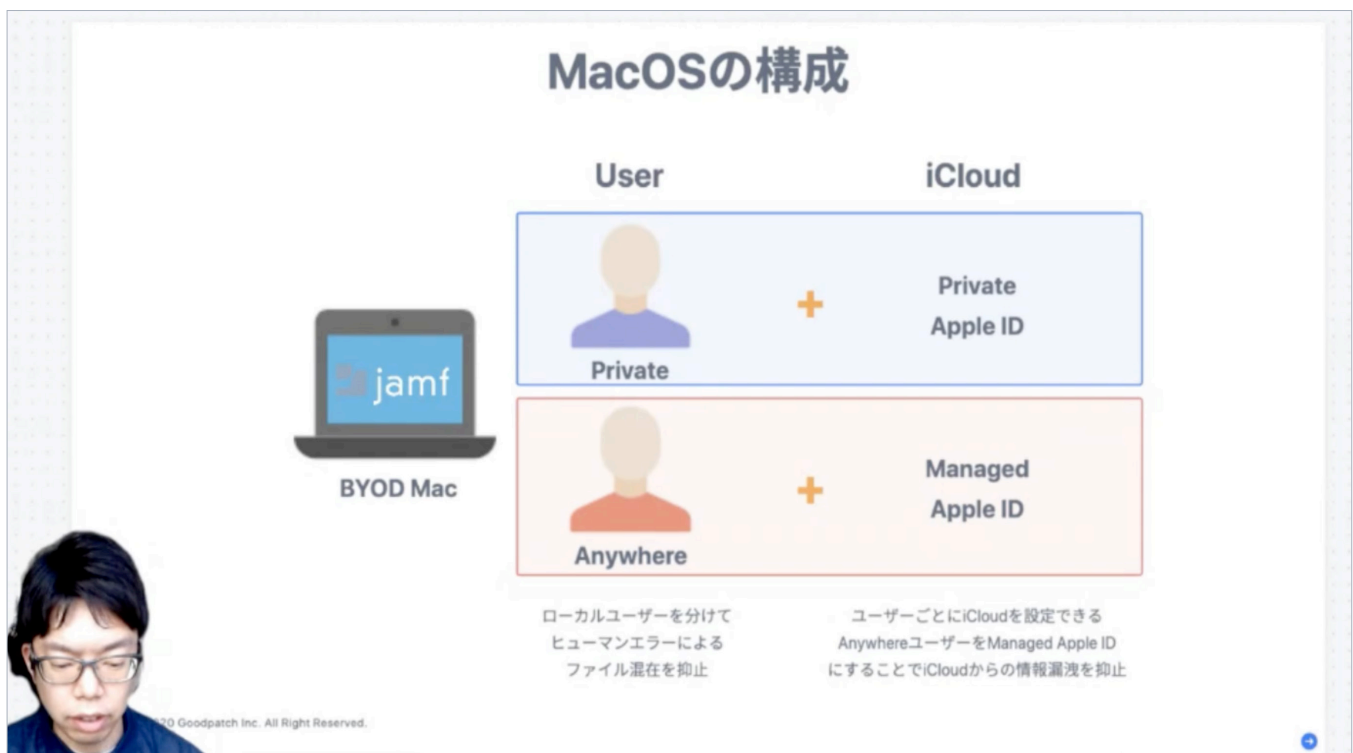
Jamf Proに関して、これは組織全体のチャレンジということはメンバー全員がよく認識したうえでの導入でした。気になったところは随時質問してもらい、導入する前にはワークフローでメンバーの同意を得たり、説明会を開くなどして、不安を解消していったりと、メンバーとの距離を縮めていますので、大きなトラブルや非難の声がメンバーから上がることはないです。(遠藤氏)

結果として、いい環境になったとみんなが感じていますし、仕事がしやすくなったという意見が出てきているので、成功だったなと感じています。(齋藤氏)

Jamf ProのSite機能を活用

●ローカル側でのファイル混在リスクを軽減

Anywhereで使用しているMacでは、ユーザーをプライベートはPrivate Apple ID、Anywhere側はManaged Apple IDで分けて、iCloudを管理してもらっています。フリーランスの方も多いので、ファイルがローカル側で混在するリスクを最小限にするためです。



JamfではSite機能を使って、貸与端末とBYOD端末を完全に別のオーガニゼーションにしています。オールコンピュータでポリシーを適用した場合に、個人の端末に対してアプリを配布してしまい、個人で購入したアプリが会社で購入したものに上書きされてしまうというリスクもゼロではありません。Siteを別にする事で、そういったトラブルを未然に防ぐことができます。

また、Jamfはスクリプトを使えば、どのようなプライベート情報も取得できてしまうので、Siteを分けることでアクセス権を分け、BYODの端末に影響を与えないようにしています。(遠藤氏)

メンバーの距離感が近いから柔軟に挑戦できる

個人所有の端末に管理システムを導入することへの合意が取れることは実はすごいことで、メンバーの合意なくしてBYODは実現できませんでした。初期に試してくれたメンバーと、遠藤が密にコミュニケーションをとり、先ほど述べたような端末のプライバシーに慎重な配慮をしながら、強い信頼関係を築いていったことが大きかったと思います。僕らはフリーランスの人が集まってプロジェクトをやりますというだけの簡単な組織ではないです。かなりウェットにやっているところがあり、プロジェクトが終わる時や大変な時期には、深夜にDiscordに集まってみんなで泣いたこともあります(笑)。メンバーの距離感が近いからこそ、柔軟に仕事を進めつつ、多少の失敗があっても、失敗をトラウマにせず前に進んでいける…だからこそ、BYOD環境の構築が成功したのではないかと思います。(齋藤氏)

※ウェビナー本編ではグッドパッチ様の今後の取り組みの説明や、質疑応答などもご覧になれます。

Webinar Information

本記事は2021年2月2日に「BrightTALK」(<https://www.brighttalk.com>)で開催されたウェビナーの内容を編集したものです。フルバージョンの動画は右記のQRよりBrightTALKのサイトで視聴いただけます。

